

1. はじめに

串間で玉壁が発掘された。江戸末期のことである。石棺に副葬されていたとのことである。この玉壁は非常に貴重なもので、前漢が冊封国に下賜した物であろう。南越の王墓が発見され発掘されたが同等のものが出土しているようだ。秦が滅びたのち、前漢が起きるわけだけれど、同時期には前述の南越・大月氏・衛氏朝鮮・高句麗が周辺国だった。これらのどの国かに下賜されたものが、串間で見つかったのであろう。

2. 玉壁伝来のシナリオ

中国を統一したのは秦の始皇帝である。紀元前221年に天下統一をした。短期間で始皇帝が病死し、その後も続かず、紀元前206年には滅んだ。次の前漢（ぜんかん、紀元前206年-8年）は、中国の王朝である。西漢（せいかん）とも呼ばれる。秦滅亡後の楚漢戦争（項羽との争い）に勝利した劉邦によって建てられ、長安を都とした。その間、燕（北京周辺）という国が生き延びているが前漢によって滅ぼされた。燕王盧綰は匈奴へ逃げるが、燕の武将衛満は、箕氏朝鮮（今の北朝鮮あたりか）へ逃げた。そこで箕氏朝鮮の準王に取り入って、前漢への辺境防衛をするので住まわせてもらうことになる。そこには沢山の中国から逃げた武人がおり、指導者に成長していく。ある時、漢が攻めてきたといい、城内に入りすぎを見て準王を攻めて追い出した。準王は、衛満に王権を篡奪されると、南走して辰国へと逃亡し、「韓王」として自立した。

衛氏朝鮮（BC195年～BC108年）は、前漢にとって対高句麗の防衛線になるため、最初の冊封国となった。そのため非常に価値のある玉壁が下賜されたであろう。南越国の王墓が発見発掘されたが、南越国に下賜されたものと串間のものは同等のようである。南越国は、はるかに大きな国であった。しかし、衛氏朝鮮は徐々に反漢に転じていく。3代目の右渠の時、前漢との対立が深まり、いつ前漢が攻めてきてもおかしくない状態になった。衛氏朝鮮の中の親漢派の歴谿御即は、右渠に対して諫言を行ったが聞き入れられず、一派を引き連れ分派したという。『魏志』韓条は、衛右渠と葛藤が発生したことにより、2000余戸を率いて辰国に南下したと伝えている。南下した時期は、漢が衛氏朝鮮を服属させるために紀元前109年から紀元前108年にかけて遠征を行う以前であり、紀元前2世紀後葉と判断される^[1]。その後、歴谿御即は先住民との摩擦を回避し、弁韓・辰韓と同化したと判断される。『三国史記』巻一に「これより先に朝鮮流民が山と谷の合間に住んで、六村をなす」とあるが、言及された朝鮮流民は歴谿御即一派を指すとみられる。親漢派の歴谿が、漢より下賜された玉壁を持ち出し新羅の六村に住着いたのだろう。従ってそのころの新羅には、土着の新羅人・日本の弥生人に近い人たちと、秦国の残党で馬韓に來たけど辰韓の地を与えられたもの、そして衛氏朝鮮の遺民が暮らしていたと考えている。AD400年前後、高句麗の広開土王の侵攻で、居場所を奪われた秦国の残党や衛氏朝鮮の遺民が、倭国への移民を求めた。日本書紀の弓月君の日本移民の願いはそんな背景だろう。新羅の軍勢を追い払った平群木菟宿禰と的戸田宿禰が、それぞれの移民先を考え倭国の発展を促したのだろうと考えている。秦国の遺民には九州東部を、衛氏朝鮮の遺民には九州東南部を指定し、その地の大和王権とつながっている豪族に橋渡しをしたのだろう。

3. 伝来地として串間が選ばれたのはなぜか

新羅より、沢山の衛氏朝鮮の遺民が渡来したと考えられるのだが、王統の証明である玉壁を持った中心人物は、なぜ串間に渡来したのだろうか。九州東南部に地下式横穴墓は分布するが、この範囲が衛氏朝鮮の渡来地である。加えて五島列島南部も、地下式横穴墓は検出されていないが渡来地であろう。日本書紀・応神天皇16年8月条によると、葛城襲津彦が朝鮮から久しく戻らないため、天皇は新羅が妨げているとし、平群木菟宿禰と的戸田宿禰を精兵を従えて加羅に遣わした。木菟宿禰らが新羅の国境まで兵を進めると、新羅王は愕然として罪に服し、弓月君の民を率いて襲津彦と共に日本に來たという。ここでは、豊の国に渡来した秦氏のみが記載されているが、衛氏朝鮮の遺民も同時に渡来したと考えている。秦氏は豊の国へ、衛氏朝鮮はそのさらに南へという裁量があったのであろう。平群木菟宿禰の祖父若しくは曾祖父は、景行天皇について南九州を征圧したのであろう。平群木菟宿禰も九州南東部に関して十分な知識を持っていたのだろう。地下式横穴墓と景行天皇の南九州の移動奇跡がよく合っている。五島では地下式横穴墓は検出されていないが、肥前国風土記に景行天皇が行ったことが書いてあり、更に隼人がいたことが書いてある。この隼人は、本来衛氏朝鮮の遺民もしくは新羅系渡来人と書くべきだったのではなかろうか。

平群木菟宿禰には、九州東南部の大和王権に繋がった豪族（前方後円墳を築造した豪族）を助け九州東南部の開発を進めてくれとでも言い含められたのだろうか。大隅から高鍋持田まで分散して住むことになった。内陸部は大和王権に繋がった豪族はいなかったが、都城・小林・えびのに進出し生活の場を得たものと思う。こ

の部分、遺骨の状況から現地住民と小競り合いがあったように考えている。

さて衛氏朝鮮系渡来人の中心人物（王と言っていたのかもしれない。）をどこに住ませるかということになるが、いわば都を置くようなことである。道教の知識を持った彼らだから、当然風水をみて決めることになる。いや、現地を見て風水の立場で考えて決めたであろう。

基本的な考えは、人体に経絡があり各所にツボがあるように、大地にも龍脈があり各所に龍穴があるという考えである。尾根筋が龍脈でその先端が龍穴で、大地の気が噴出しとても縁起の良いところと考えられている。その周辺に墓や町を作るととても繁栄すると考えられているのである。

背後の山が玄武で東側に山があり青龍という。西側にも山があり白虎という。両方の山を砂と言い、大地の気を守っている。背後の山の尾根筋が龍脈で、その先端に龍穴という穴がある。ここから気が噴出しているとしている。概念図の明堂は平地のことで、風水では必須となっている。ソウルを概念図に当てはめると、それほど厳密さが求められるものではないことがわかる。自然の地形がおおよそ合っているということだろうか。

日本の風水では、西側は大道で東側に川があることが風水の基本となっているようだが、ここでは当然前述の中国・朝鮮の考えを尊重するべきであろう。

次に、図3の串間市の航空写真であるが、写真中央部分に下向きに尖った緑の部分だけ有り、ここが北から続く尾根筋の先端であり龍穴であろうか。明治の字図を見ると、その狭い一角が墓処とある。昔からお墓にしていたのだろう。その周辺は、唐人町・銭亀・合原という字で、古墳時代の遺物が出てくる。銭亀からは明刀銭が出ている。

こんな南が海に面して平野があるという地形は、南九州では国分周辺かこの串間である。国分では地下式横穴墓が検出されていないので、渡来人は行っていないものであろう。南九州の南端部は平野がない。ほぼ一択である。

この串間を、衛氏朝鮮系渡来人の中心都市とし、王統の証明である前漢より下賜された玉璧と、復興の資金明刀銭を大事に保持し続けたものと思う。前漢のお菓子である灰汁巻きも、この渡来人が広めたものであろう。地下式横穴墓の分布と灰汁巻きの分布がよく合っている。灰汁巻きが薩摩半島にもあることは、薩摩藩が広めたからだろう。地下式横穴墓も灰汁巻きもこの地だけでなく少数だが他の地域にもあることもよく似ている。両方とも渡来した文化であるから。

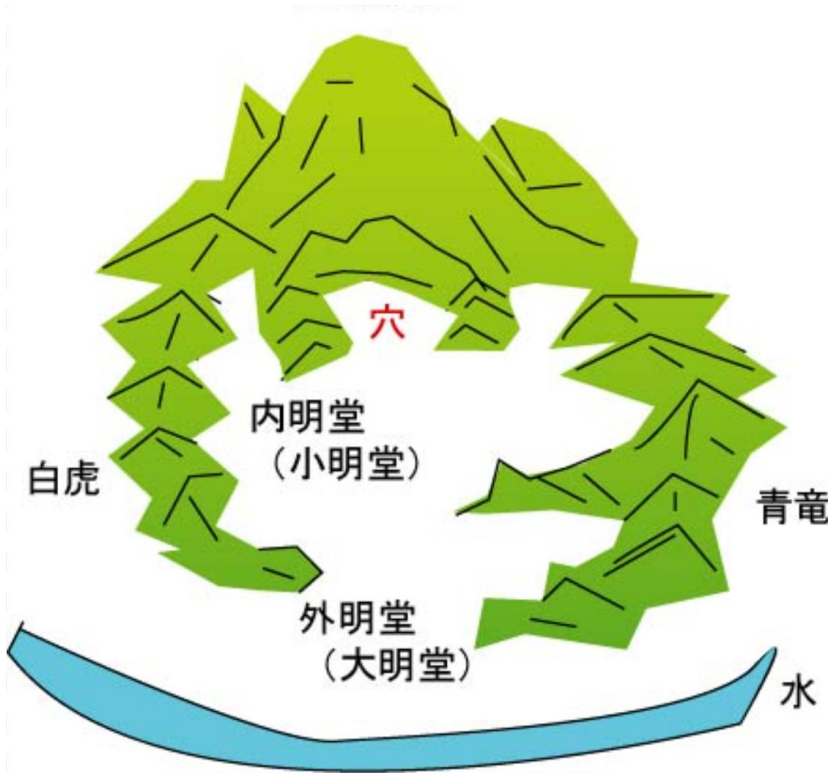


図1 都市風水概念図（上が北、下が南、左・右が西・東である。3図とも。明堂は平野。）



図2 韓国ソウル風水



図3 串間中心部航空写真

4. おわりに

串間の玉壁について、大筋は説明できたように思う。なぜ、日本以外で500年ほどたっているのに、地下式横穴墓を維持できたのか。日本書紀に渡来人は朝鮮半島南西部を經由してやってきたように書いてあるための疑問である。これは、日本書紀の間違いで、新羅経由が正しいようだ。秦氏の建築様式や仏教が新羅のものであるためである。そうとなると、新羅は朝鮮半島南部ながら乾燥地で、ピョンヤンや北京と同じくらい降雨量が少ない。ここならば、地下式横穴墓を維持できたのである。日本に持ち込んで、100~200年で地下式横穴墓を捨てて横穴墓や土葬に転換していったものと考えている。

この衛氏朝鮮系渡来人が、南九州に上陸して畿内進出をしたのが髪長姫の加古川上陸や、住江仲皇子暗殺や雄略天皇葬儀の際の隼人の自死の話だろうと考えている。そう考えるとシナリオがうまくつながるのだが、髪長姫が畿内に来た時、仁徳天皇は幼児の年齢である。仁徳天皇と皇后の孫が雄略天皇で、仁徳天皇と妃の髪長姫の子が雄略天皇の皇后である。応神天皇の孫のような髪長姫。仁徳天皇の娘のような妃の髪長姫。その娘は雄略天皇の皇后。仁徳天皇の同世代の皇后。仁徳天皇の孫の雄略天皇。どこかに間違いがあるものと考えている。

資料

		紀元前				一	二世紀	三世紀	四	五	六	七世紀	八世紀	九世紀	十	
中国	夏 (伝説上の国)	殷 (商)	周 (西周)	周 (東周)		秦	前漢	新	後漢	三国時代 魏 呉 蜀	西晋	東晋 五胡十六国	南北朝	隋	唐	五代十国
	春秋	戦国								この時代の詳細図						
	2070頃	1600頃	1046頃	770	403	221	202	8	25	220	265	304	439	581	618	907
日本	縄文時代			弥生時代				古墳時代			飛鳥	奈良				
	12000頃 (参考)			5世紀頃 (参考)				3世紀頃			6世紀末	710	794			
朝鮮									弁韓	任那		新羅				
									辰韓	新羅						
									馬韓	百濟						
	箕氏朝鮮				楽浪郡・帶方郡				高句麗							
	夫余				高句麗											
								前1世紀頃		4世紀半ば		676				

図4 中・日・韓の年表（衛氏朝鮮は、箕氏朝鮮と楽浪郡・帶方郡の間に入る）



図5 衛氏朝鮮時代の地図

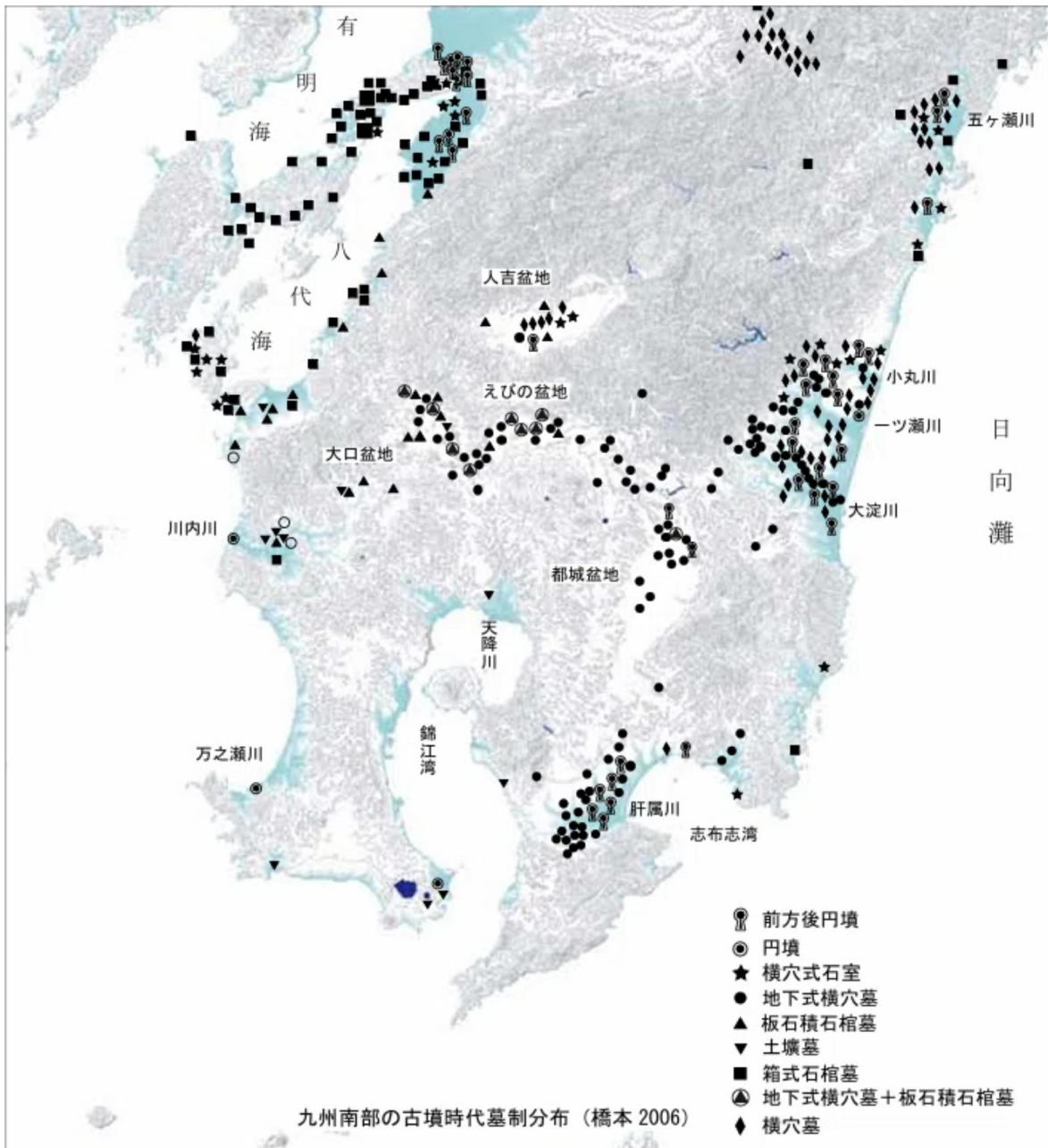


図6 地下式横穴墓の分布 (●が、地下式横穴墓)

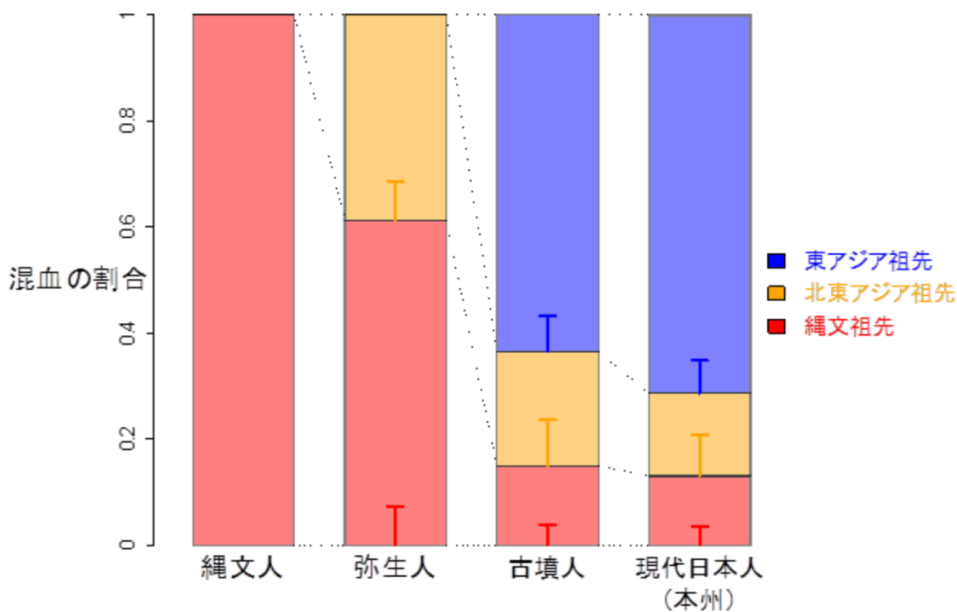


図7 縄文時代から現代に至るまでの日本人ゲノムの変遷



日本で発見された唯一の玉璧

図8 串間出土の玉璧

日本で発見された唯一の玉璧・国宝級・紀元前2世紀頃の完品

[【東京\(財\)前田育徳会所蔵】](#)

「中央に穴(孔)がある円形で直径が三十三・三センチメートル、中央の穴の直径が六・五センチメートル、厚みが〇・六センチメートル、重さ一六〇〇グラムの完全な玉器である。璧は、硬玉で鉄より硬いといわれる。

この璧の表裏両面に見事な文様が施されている。

この璧の表面には、同心円で三帯に区切られている。一番外側には五つの竜首文が配され、外周と内周の間に璧を識別する穀粒文が、整然と並んでおり、一番内側の内周には、三体の鳥文が波状列に彫刻されている。

1818年に穂佐ヶ原集落に住んでいた農夫・佐吉という人物が発見。玉璧ともに玉・鉄器があったとされるがそれは紛失。穀璧とも呼ばれる。



南越王の墓から発掘された玉璧D54。

「冬季オリンピックのメダルのデザインに要素を取り入れることは、嶺南文化の貢献です。」

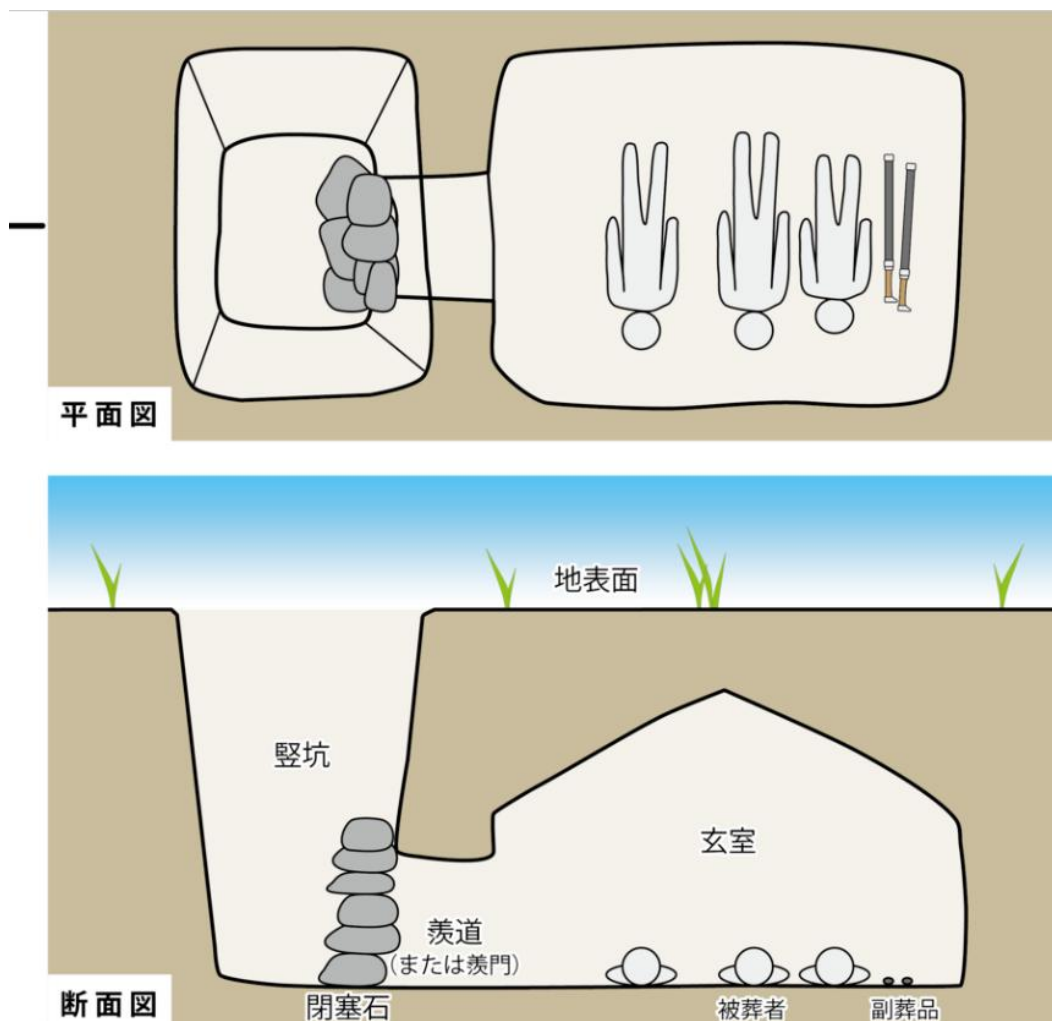
「秦末から前漢にかけて、玉璧は国への献上品とみなされていました」と、王維宜氏は南方都市报の記者にD54玉璧の写真を示しながら語った。この玉璧は青磁玉で作られており、色は濃緑色で、外径28.1センチ、内径6.2センチ、厚さは約0.8センチ。外郭と内郭には龍文が、中央部には渦巻き文が描かれている。王維宜氏によると、このような高品質の玉と、三節に分かれた装飾文様を持つ玉璧は、同時代の漢墓では非常に珍しいという。

図9 南越王墓より出土の玉璧

図10 明刀銭



図11 地下式横穴墓



「地下式横穴墓」の模式図